

主人公の新夏は5年の交際を経た恋人の啓久にプロポーズを受け、幸せな家庭を築いていくはずだった。しかし、プロポーズを受けた翌朝、啓久は電車の中で女子高生を盗撮してしまい逮捕される。この物語はそんな衝撃的な展開から始まる。この物語は2部構成で、前編では盗撮という許されない行為をした彼氏に対し、葛藤を重ねながらも真摯に向き合おうとする彼女の目線から描かれている。後編では一転して、彼氏の視点へと移る。彼は出来心というにはあまりにも重すぎる自らの過ちによって彼女を深く傷つけ、失ってしまった。その苦しみの中で彼は何を考え、どう生きていくのか、その実情が緻密に描写されている。

本書は、人間の打算や弱さ、矛盾を抱えた感情の深層心理について読者に問う。恋や愛は多少の疑いや損得勘定が含まれていても成立する。相手に尽くすけど見返りも欲しいだとか、好きだけど疑ってしまうだとか。なんならそれらの要素が現実味を帯びさせているのかもしれない。しかし、「信じる」という行為はただ只管純度を求められる。純白以外はすべて黒である。その矛盾が私たちに強い違和感と問いを残す。

新夏は一度、彼の過ちを受け入れ、一緒にいる選択をした。しかし、彼女のそばに立っていた人がスマホのカメラを使用して電車内の広告を撮ったとき、「カシャ」という音が響いた際、彼女は反射的に啓久のほうを見てしまった。その後、啓久は新夏に別れを告げる。おそらく新夏は彼を「性加害者」と見てしまう自分、啓久は新夏から「性加害者」として見られる自分が許せなかつたのだと思う。二人は確かに愛し合っていた。それゆえに、それぞれの「自己否定」から逃れるためには、別れるしかなかつたのだと思った。愛しているからそばにいる選択肢をした新夏だが、女性的な本能で彼に嫌悪感を抱いている矛盾に私はもどかしさを感じた。しかし、当人と共に心をすり減らしてまで自分の感情の答えを探し出していたこと。答えははっきりしたものであろうと、おぼろげで曖昧なものであろうと、その事実に愛は確かにそこにあつたのだと感じさせられた。

どんなに愛していても、相手のすべてを知ることは不可能で、受け入れきれない部分もあると思う。しかし、受け入れる、受け入れないに関わらず、「一緒に傷つくこと」が大切なのだと思った。

読み進めれば読み進めるほど、答えの出ない問い合わせに心に靄をかける。信じるとは一体何か。愛することと受け入れることは同じなのか。結論は与えられず、考える余白が与えられ、この物語は後を引く。

本書では愛と信頼の脆さ、人の感情の矛盾を直視させられる。共感できないところも少なからずあると思う。しかし、その脆さにこそ、人間の真理が隠されていることを本書は教えてくれる。

審査委員による講評

経済学部准教授 西村 嘉人

評者は、『恋とか愛とかやさしさなら』という作品を通じて、盗撮という行為をきっかけに、愛と信頼の脆さや「性加害者」として見られることに対する自己否定に着目し、「カシャ」という音が電車内に響いた一瞬の場面を手がかりに信頼が揺らぎ、二人が別れざるを得なかつたという心理的な必然性を「それぞれの自己否定から逃れるため」と丁寧に読み解いている点は評価でき、この書評は佳作に相応しいといえます。しかしながら、性犯罪の社会的な問題性や、評者による本書の批判的検討が十分に行われず、「一緒に傷つくことが大切」という結論に帰結している点が、この書評の惜しいところです。